

遂行的アイデンティティ構築の原則に関する一考察 ーインタビューにおける語りの分析からー Thoughts on Identity Construction Principal: An Analysis of Narratives in an Interview

ミラー 成三(千葉大学人文社会科学研究科)

Seizo MILLER(Chiba University,
Graduate school of humanities and social sciences)

Abstract

Recent studies have shown that there are two types of identity: one is the unstable and integral identity that is organized during interactions, and the other is a relatively fixed identity that is formed by accumulation and sedimentation of the preceding identity. In this study, I will argue that identities which are organized during interactions are based on the own person's awareness of identity construction. I will discuss that this awareness is formed by identities that were organized and reorganized through the various interactions they have participated in, as well as the latter idea previously listed above. For this purpose, I analyzed the small stories narrated by interview, and examined them by the typological approach method.

1. はじめに

アイデンティティ研究では近年、アイデンティティが相互行為を通して構築される、流動的で複合的なものであるという考え方が主流となっている。一方で今日では、そのようなアイデンティティに加え、それが繰り返されることによって形成されるやや固定的なアイデンティティの存在も指摘されている。また、流動的で複合的なアイデンティティは、様々な相互行為を通して繰り返し構築されることによって習慣化され、アイデンティティをディスコースにおいてどう構築するかという原則となる場合がある。本稿では、インタビューにおける語りから、この原則を分析し、類型論的なアプローチを用いて考察を行う。そして、相互行為を通して示される、あるいは構築される流動的で複合的なアイデンティティが繰り返されることによって、そのような原則が形成されていることを論証する。

2. 先行研究

現在アイデンティティ理論は様々な分野に応用され、研究が進んできているが、そのほとんどは Erickson(1963=1977 & 1980; 1959=1973; 1968=1973)のアイデンティティ理論を出発点としている。Erickson 自身は自我アイデンティティを研究の中心としていたものの、その後の研究では自己アイデンティティを中心に研究が行われてきた(椎野 1980)。すなわち、対自ではなく対他関係から形成されるアイデンティティが分析の対象となってきたわけである¹。

近年では異文化接触とそれによるアイデンティティの変化やゆらぎ研究が増加してきてい

る。日本では海外移住など文化間の移動を経験した日本人の研究がある。例えば、留学など海外へ一時的に滞在する日本人を対象とした研究(窪田 2005)や、一時滞在後に帰国した児童や生徒を対象とした研究(塘 2010)、また短期ではなく、海外への移住など長期的に滞在する日系人やその子供に関する研究(野崎 2007)などがある。一方、このような異文化接触を経験した日本人のアイデンティティのみならず、日本に住む外国人の異文化接触とアイデンティティ、特に文化的アイデンティティの関連性を扱う研究も増加している。例えば、鈴木(2008)による日本人と国際結婚をした外国人配偶者やその子供を対象とした研究、関口(2001)による南米からのニューカマーを対象とした研究などである。

他方、グローバル化によって人々の世界的な移動が日常化している現代において、国や民族では規定できないアイデンティティが見られるようになってきており、ナショナル、あるいはエスニックという言葉では包含できないようなアイデンティティを文化的アイデンティティとして捉える研究が増えてきている(浅井 2006 など)。Hall(1990=2014)によると、文化的アイデンティティ(Cultural Identity)とは、「歴史と文化の言説の内部で創られるアイデンティフィケーションの地点、アイデンティフィケーションや縫合の不安定な地点」であり、「本質ではなく、一つの位置化(positioning)である」(p. 94)という。すなわち、自分の過去と現在の経験を結びつけ、人生を意味づけするその語りの中に文化的アイデンティティが現れてくるものとしている。

このような文化的アイデンティティの視点は、「わたし」が「ある」ものだという考えではなく、「わたし」は「する」ものだという考え方(中河 2010:53)にもとづいている。アイデンティティをこのように捉える視点のさきがけとなったのが Goffman(1959=1974, 1963=2001)である。Goffman(1959=1974)では、「自己」が、人々が行う自己の属性の呈示(可視化と不可視化)と、その呈示の受け手による解釈によって成り立っているとしている。例えば、ステイグマを持っている者は「成りすまし」(passing)、「カモフラージュ」(covering)(訳は石川 1992)などの印象操作によって役割距離を示すことで、他者に積極的に働きかけを行っており、他者はその行為を自分なりに解釈し、ステイグマを持っている者としてはみなさなくなる(Goffman 1963=2001)。すなわち Goffman はアイデンティティを、個人ではなく状況に埋め込まれたものとして捉えていたわけである。このような視点は、社会学や社会構築主義の立場の研究においても見られ(上野 2005)、日常的に使用する言語とその場で表出される自己が強固に関連しており、アイデンティティは静的ではなく動的であることが強調される(Gergen, 1999=2004)。このような視点は、従来の心理学の分野においてあまり一般的ではなかった(末田 2012)。一方で、社会学や第2言語習得の分野においては、アイデンティティを実践に現れる流動的で、複雑なものとして捉えた研究が広がりつつある (i.e. Norton 2000; Pavlenko 他 2001 など)。

他方、流動的で複合的なアイデンティティを認めたうえで、従来の固定的なアイデンティティについて新しい視点を与えようとする研究もある(i.e. Baynham 2015; Block 2013)。Baynham(2015)はアイデンティティには、その場その場の会話で言語を通してどう自らを表現しているか(蓄積アイデンティティ brought about)という側面と、それよりももう少し固定的なもので、自分が繰り返し構築してきた自己(蓄積アイデンティティ brought along)という側面も持っていることを指摘する。さらにそれぞれを以下のように定義している。(p.73, 引用者訳, []は引用者による)

「identity brought along」 thus captures the accumulation and sedimentation of identity positions in habitus not as some essentialist preexisting category but as discursively constituted, enabled and constrained by the limits of language.」(「蓄積アイデンティティ」は、本質主義的に先在するカテゴリーではなく、言語によって可能となりまた強いられる、ディスコース上で構成される、ハビトゥスとしての、アイデンティティ・ポジションの蓄積そして堆積をとらえる[言葉である]。)

「identity brought about」 captures the performativity by which identity is contingently made and remade in discourse, either with or against the grain of dominant discourse.」(「遂行的アイデンティティ」とは優勢なディスコースの性質への賛成、もしくは反対によってディスコースで偶然的に構成、再構成される全てのアイデンティティのパフォーマティビティをとらえる[言葉である]。)

後者の遂行的アイデンティティとは、Hall(1990=2014)が述べる文化的アイデンティティと同様のものを指しているように思われる。すなわち、アイデンティティとはディスコース上で、相互行為を通して構築されるものであるとする見方であり、Butler(1990=1998)が指摘するアイデンティティのパフォーマティビティを指している。

これに対して、前者の蓄積アイデンティティは、歴史化されたアイデンティティ(historicized identity)がディスコースに、どのように潜在的に持ち込まれるか(brought along)を指しているという。Baynham はこれを説明するために、Bourdieu のハビトゥスという概念を提示する。Bourdieu(1980=1988)によると、ハビトゥスとは「歴史の生産物」であり、「それら過去の経験は、各々の組織体に・知覚・思考・行為の図式という形で沈殿し、どんな明確な規則よりも・・・時間の推移の中での実践の恒久性を保とうとする傾向をもっている」(p. 86)ものである。すなわち Baynham は、日々の生活の中でのパフォーマティブな行為が繰り返されることによって蓄積されて習慣化、あるいは身体化されると指摘しているのである。このような行為の繰り返しは、Butler(1990=1998)が述べる反復とも言うことができよう。

さらに、この蓄積アイデンティティがディスコースにおける言語使用によって、遂行的アイデンティティとして構築される過程においては、本人が他の参加者にどのように見られたいかが関わってくると考えられる。例えば Goffman(1963=1980)が指摘するように、スティグマだと判断されうると本人が感じているようなアイデンティティがあったとすれば、それを他者には知られたくないという意識が働き、ディスコース上では別のアイデンティティを演じて構築することによって、自身のスティグマを潜在化させるのである。この二つのアイデンティティを同時に捉えようとするならば、遂行的アイデンティティの構築に関わる意識にも目を向ける必要があるだろう。Baynham(2015)では明言されていないものの、ハビトゥスとはディスコースにおける「位置や場の相互行為を一定の方向に方向付ける規則や規範を内面化し習得することで」形成されるものであり(岸 2009: 45)、この蓄積アイデンティティは固定的なアイデンティティのみを指しているものではないと考えられる。すなわち、蓄積アイデンティティとは、蓄積された遂行的アイデンティティでありながら、それを一定の方向に方向付ける規則をも含むものではないだろうか。

近年の接触場面研究においては、私たちが接触場面における言語使用を管理しているという、いわゆる言語管理(Neustupný, 1985; 1994)には、接触場面における言語管理に加え、習慣化された「言語に対する行動」(behavior towards language, Fishman 1972)である接触場面に向かう管理(村岡 2010)についての指摘もされている。アイデンティティが相互行為を通して構築されるものであるとすれば、その構築に関する規則があると考えるのは、自然なことであるようにも思える。以下では接触場面に向かう言語管理と、それを分析するための類型論的アプローチについて記述し、本研究における遂行的アイデンティティ構築の原則について述べる。

3. 類型論的アプローチ

Neustupný は言語の社会的な側面に注目して典型的に考察を行っており(Neustupný 1978), そこからより広い文化や社会的側面への、類型学的アプローチの適用について論じている(ネウストプニー 1989)。また、村岡(2010)ではネウストプニーの類型論的アプローチを用いながら、習慣化された言語管理がどのように記述されるべきかが述べられている。以下その内容を簡単に記述しながら、本研究における類型論的アプローチと遂行的アイデンティティ構築の原則について述べる。

類型学的アプローチを言語からより文化や社会的な側面へ適用するにあたり、ネウストプニー(1989)はタイプを「相互依存の関係にある現象のセット」(p. 283), もしくは「同一または類似の一般原理のセットにより生成されたために、相互に関連している社会的特徴の一セット」(p.288), あるいは「さまざまな程度の一般性をもつ原理により生成された相互に関連のある特徴のセット」(p.301)と規定し、全体論との違いを以下のように強調する。「第一に、タイポロジーは、同一の一般原理で支配されている数多くの特徴のセットがあることを前提にしているものの、一つの文化や社会のあらゆる特徴が単一の原理で支配されるとは措定していない」、「第二に、あるタイプを支配する一般原理は、確かに下位の新しい原理や規則を生成し、社会的特徴を生成する。しかし、ある原理が具体的な条件の下でどのように作動するかは多くの要因に影響される」、「第三に、社会の中の行動上のバリエーションを逸脱行動とみなす立場をとらない」(p.286)。すなわち、社会や文化における特徴は、複数の原理によって成り立っており、具体的な条件下で作動する一つの原理がその体系全体を指すことにはならない。そして単一の体系内には複数のタイプが共存しているため、ここでその原理にあてはまらない者は逸脱ではなく、その体系を構成するバリエーションやコンフリクトとしてみなされる。

そして、言語的、非言語的を問わずさまざまなレベルのタイプについて記述し、タイプを構成する原理をいくつかの段階にわけ、以下の尺度を提示する。なお、ネウストプニー自身が述べるように、これは「二つ以上の原則の一般性レベルを比較する」(p.301)ための尺度の出発点であり、すべての原則をここに当てはめることができるものとして提示しているわけではない。

- ①決定要因：最も一般的な原理、特定の生産様式や決定的に重要な経済的ないし地理的な要素
- ②マクシム(大原則)：広範囲に影響を与えるが、決定要因ほど一般的ではないもの
- ③ストラテジー(戦略)：ある特定の領域の行動に固有のもの
- ④普通規則：行動の区切れ(segment)のいくつかの特徴を支配しているもの

⑤併記規則：普通規則の例外であり，普通規則と同じレベルに属すもの

村岡(2010)では，中国吉林省延吉市で行われた，朝鮮族の大学生に行ったインタビューに現れたマキシムとストラテジーを分析，考察している．その一つを取り上げてみたい(p.55, 56)．なお，マキシムに関して，村岡では表記はマキシムとなっているが，表記を統一するため，直接引用部以外はマクシムとする．

マキシム：朝鮮族の行く場所，漢族の行く場所を分けたりしない

ストラテジー：漢族の美容師はだいたい北京で勉強してくるが，朝鮮族の美容師は韓国の流行を勉強しているので，朝鮮族のほうを選ぶ

村岡の分析では，ここでのマクシムは，少なくとも延吉市におけるネットワークのあり方に対する社会一般の態度を示している．そして，ストラテジーの方では美容院の選択が技術力を基準にしており，技術力が高い，あるいは望ましいと思う技術をもっている美容師であることから朝鮮族の美容師が選択されており，必ずしもマクシムと矛盾しないことが述べられている．これはネウストプニー(1989)が述べるような，「より高い次元の複数の原理がより低い次元の一つの原理の形成を促している」(p.304)，もしくは「体系内で同時に作用しているいくつかの他の原理によって決定」(p.305)されている事例として考えられるだろう．すなわち，インタビューで直接的に語られていないマクシムとして，「韓国の流行に従う」というような原理をもっており，それに則ったストラテジーが語られている，と考えることができる．当然ながら，経済的な理由をマクシムとして持っていれば，「安いところに行く」というストラテジーが語られることが予想される．このような複数の原理が複雑に絡み合うことによって，ネウストプニーが述べるようなバリエーションやコンフリクトが発生するわけである．

村岡(2010)はさらに，決定要因から規則までの各レベルの特徴と階層性の性格について以下のように説明を加えている(p. 53)．

(i)ネウストプニーが指摘しているように，これらの関係はゆるやかな相互依存関係としてあり，必ずしも構造主義的な意味での階層性が含意されているわけではない．相互依存関係は顕在化されていない言語意識にも開かれた系をつくっていると考えられることも可能である．

(ii)これらの相互依存関係について，通常の(unmarked)言語使用であればルールとストラテジーとマキシムの間に自然な相互依存関係が見られるが，ときにはマキシムがルールとの間に強い関係を作っている場合(e.g. 社会的・政治的なマキシムがルールを縛っている)や，マキシムとストラテジーが対立しているように見える場合(e.g. 経験してきた場面や状況によってマキシムとは異なるストラテジーを構築せざるを得なかった)，などの矛盾をはらんだ相互依存関係がありうる．

(iii)相互依存関係を開かれた系としても構築していくとすれば，そこに含まれるルール，ストラテジー，マキシム，決定要因にはある程度，雑多な言語意識が含まれざるを得ない．重要なことは，あくまでも階層的な関係性であり，階層内のメンバーシップではないと考

えられる。

4. 遂行的アイデンティティ構築の原則

村岡(2010)ではさらに、ディスコースにおける言語使用や言語管理(Neustupný 1985; 1994)には、「当該場面に限られた、ミクロな現象だけではなく、接触場面に参加する際の言語に対する態度や意識」(p. 49)が観察可能であることが指摘されており、このような習慣化された言語に対する行動を接触場面に向かう管理として、類型論的アプローチによる考察が行われている。それによると、上述の類型論的アプローチにおけるルール、ストラテジー、マクシムないし原則、決定要因という四つの階層のうち、マクシムとストラテジーは「顕在的ないし潜在的に知識として個人に所有され」(p.53)ているものであり、接触場面に向かう管理にあたるものとして考えることができるという。

ここでの考察は、相互行為を通して示される遂行的アイデンティティについても同様のことが言えるだろう。例えば Goffman(1963=1980)がパッシングと呼ぶような、スティグマだと判断されうると本人が感じているような蓄積アイデンティティを他者に隠そうとする行為がそれにあたる。このような行為は、日本語の使用や学習の原則と同様、相互行為が繰り返されることによって形成され、ある程度当人の中で習慣化されていくものであると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究においては、インタビューにおいて語られる遂行的アイデンティティ構築に関わる当人の意識もまた、顕在的ないし潜在的に知識として個人に所有されるようになった、いわば遂行的アイデンティティに対する態度や意識として捉えていく。本研究ではひとまずこのような遂行的アイデンティティ構築に関する意識を遂行的アイデンティティ構築の原則として考えていきたい。そして、遂行的アイデンティティ構築の原則を類型論的アプローチで考察していくために、以下の4つのレベルを定める。なお、それぞれのレベルを指す用語については議論すべき点も残っているが、ここではひとまずネウストブニー(1989)の用語に従いたい。

- ①決定要因：遂行的アイデンティティが繰り返し構築されることによって形成された蓄積アイデンティティ
- ②マクシム：場面や参加者に関わらない、広く一般的に適用可能な自己呈示の意識
- ③ストラテジー(戦略)：特定の参加者や、特定の場面などマクシムよりも限定的な自己呈示の意識
- ④普通規則：マクシムやストラテジーを、相互行為を通して達成するための実際の行動や言語使用

マクシムやストラテジーは、インタビューによって語られる、一般的な原則や社会通念、個人的な態度や方針などが含まれる。次の例を見てみたい。

例 1

1	ロング	今はそんなにないですかね
---	-----	--------------

2	IR	そんなってことはたまにはある感じですか
3	ロング	たまには::, まあたまにはあるっていうか名前を言ったらほぼ聞かれるので、ハーフですか::↑みたいな hh
4	IR	あ::
5	ロング	いや、一応アメリカ人ですって hh
6	IR	なるほど h 一応 hh
7	ロング	そう、でもずっと日本なんで英語できないんですけど、ってね hh
8	IR	あ::もう言っちゃうんですね
9	ロング	そうですね、だいたいじゃあ英語::できるんですね:とか、ん:, これ英語でなんていうのみたいなことを言われるので、うん、事前にもう英語できないです、って言っちゃいますね
10	IR	なるほど

この例ではアメリカ人であるロングに対する調査者(以下 IR)のインタビューからの断片である。詳細な分析は後述するとして、ここでは以下の2点だけ確認したい。一つ目は、L1「そんなにない」という弱める表現形式の使用や、L3からの体験談がL2におけるIRの確認に対する返答として語られる、あるいはL7がL6における繰り返しに促されているという事実から、IRに対しても自身の「外国人性」、あるいは「アメリカ人性」に関する質問に対する返答に消極的であるように見えるということである。このような消極的な姿勢は、広く様々な場面に向けたロングの個人的な態度であると考えられる。そして二つ目は、ここでの語りがロングの日常的な経験の積み重ねとして語られており、特に初対面場面においては「一応アメリカ人」であることと、「英語ができない」と習慣的に言っていることが語られていることである。すなわち、自身の外国人性が相手に露見した場合には、自分が「一応」アメリカ人であるが、英語ができないと述べるということを習慣的に言っていることが語られている。これは「アメリカ人」にかかる英語ができるという期待を否定する、ということであり、そのアメリカ人性を最小化するというロングのストラテジーが語られてるということができよう。ロングはここでは個人的な態度を語っているが、社会的な一般的な原則や社会通念が語られることも考えられる。

一方で、前述のとおりマクシムやストラテジーが、複数のより高い次元の原理によって決定することには注意が必要である。すなわち、高い次元の原理と矛盾するようなマクシムやストラテジーが語られていた場合、そこには必ずインタビューで語られていない別のマクシムやストラテジーがあるということである。

普通規則に関して、ネウストプニー(1989)では個々の料理の作り方についての普通規則について言及がされているが、すなわち実際の場面においてどのようにふるまうか、あるいはどのような言語使用をすべきか、という知識が含まれていると考えられる。村岡(2010)では、上記4レベルのうち、マクシムとストラテジーが接触場面に向かう管理として考察されているが、本研究ではこの4つのレベルすべてを遂行的アイデンティティ構築の原則として考えている。注意すべきなのは、インタビューにおいても普通規則のレベルの語りが見られることであろう。

例えば言語使用に関して言えば、今(2012)では、日本居住の韓国人である KR2 が望む人との付き合い方を実現するために、仲良くなった友達を「お姉さん」と呼ぶ例が挙げられている。すなわち、「人とは、個人的に自由に付き合いたい」というより高い次元の原理を、実際のインターアクションにおいて「お姉さん」という呼称を使用することによって実現することが語られている。遂行的アイデンティティについて置き換えるならば、先の例において、ロングが事前に「英語ができない」と述べるのがこれにあたると言えよう。このように、インターアクションにおいてみられる普通規則の一部はインタビューで語られる場合もある。このような事例はまさに習慣化された普通規則が新しくできつつある、もしくは変化している例とすることができる。

5. 調査概要と分析の枠組み

5.1 インタビュー概要

以上のような考察をもとに、データとしては不十分ではあるが、2015 年の 10 月に行われた 1 名へのインタビューの事例における遂行アイデンティティ構築の原則の記述を試みる。

本研究では、日本に居住する外国にルーツのある者を対象とし、また日本に長期滞在してる、もしくは長期滞在の意思がある者を条件として設定した。これは長期滞在の意思があるものであれば、何かしらのネットワークを構築しやすく、必然的に他者との交流をする可能性が高くなるし、そして他者との交流が増えるほど、相互行為を通して遂行的アイデンティティを構築する機会も増えると考えたことによる。調査協力者にはインタビューを行い、そこでの語りから蓄積アイデンティティや、遂行的アイデンティティ構築の意識を分析することとした。インタビューはライフストーリー研究(桜井 2002)等を参考にし、半構造化インタビューの形式で行われた。インタビュー時間は 1 時間 30 分程度であった。

5.2 ロングのプロフィール

本研究では収集されたインタビューのうち、ロングの事例を対象に分析を行う。ロングのプロフィールは以下の通りである。なお名前は仮名であり、年齢や滞日歴は調査時のものである。

表：調査協力者

名前	性別	年齢	出身国・出身地	滞日歴	身分
ロング	男性	20 代	アメリカ	27 年	社会人

ロングは、母親が日系アメリカ人であり、父親がヨーロッパ系アメリカ人であり、ロング自身も日系アメリカ人にあたる。ロングはアメリカで生まれたものの、生後 1 年ほどで両親とともに来日し、以降日本で生活している。教育を全て日本で受けてきており、日本語のレベルはネイティブレベルと言ってさし支えない。小学生ころまでは、家庭内ではほぼ英語を、家庭外では日本語を使用するという生活を送っていた。中学生ごろから家庭内でも日本語を使用するようになり、英語を使用する機会は限られていた。高校を卒業後、関東の大学に入学し一人暮らしを始めたころには両親と話すことも少なくなり、ほぼ英語を使用しない状況となり、自身の英語の能力が落ちていることに気づいたが、当時は特に気にしていなかった。また、大学ま

ではまわりから外国人として扱われることがあり、それに不満を持っていたというエピソードをいくつか語っている。大学を卒業後、新潟にある企業に入社したが、数年後に転職をし、それを機に関東に戻って日本人の妻と結婚をする。現在は子供も生まれているが、子供には英語をきちんと学んで欲しいと考えていることを語っている。ロングはインタビューを通して、自身の英語の能力や英語の使用について語る事が多く、本人にとって一つの重要なキーワードとなっているようである。

5.3 分析の枠組み：スモール・ストーリーと語りのレベル

本稿では特に協力者がインタビューで語ったナラティブ、特にスモール・ストーリー (Georgakopoulou 2007) が語られている場面に注目する。スモール・ストーリーには、現在や、未来、仮定の出来事を語ることや、ほのめかし、語りの拒否などが含まれるという (Bamberg 2004; Georgakopoulou 2007 など)。

インタビューでスモール・ストーリーが語られる際には、①語りの世界でのやりとり、②インタビューという相互行為でのやりとりの両方を見ることが必要となる。①の分析においては、語りの世界におけるやりとりが分析される。ここでは、語られるストーリーの登場人物としての自分が、他の登場人物とどのように関わっているかを見ることによって、語り手が何について語り、またその世界をどう捉えているかを導き出すものである。②では語りが行われる相互行為に注目し、今ここの語り手としての語り手が、なぜそこでその語りを行ったのかという行為の意味を分析する。これによって③「自分をどのように見てほしいのか」、「私は何者なのか」という包括的なアイデンティティを分析することが可能となるという (Bamberg 1997; 2004)。ここで分析されるアイデンティティとは、進行中であるストーリーテリングの常用を超えて保っている、ほぼ安定した実態としての語り手の自己である (イェルガコポロ 2013) という。

一方すでに示したように、インタビューで語られる意識には、決定要因から普通規則のまで様々なレベルが含まれている。よって本研究では、レベル3で分析されるものを遂行的アイデンティティ構築の原則としてとらえる。すなわち、スモール・ストーリーが語られる場面に注目して、①と②を分析することによって、③遂行的アイデンティティ構築の原則を導き出すこととする。なお、原則以外に関しても断片を提示しながら補足的に示す。

6. ロングの遂行的アイデンティティ構築の原則

ロングはインタビューで、現在は自分がアメリカ人であると考えていると報告していた。一方で過去には日本人だと思っていたことも語っており、日々の相互行為や法的身分によって変化したものと考えられる。またこれは一貫しているわけではなく、いまだ生活の中で揺れ動いているものと思われる。またロングは自身がアメリカ人に期待される行動をすることができなと考えており、自分がアメリカ人であることは潜在化させるようにしており、顕在化した際にはそれを最小化するように努めている。他方、友人間では自身がアメリカ人であることはコミュニケーションのリソースとして活用され、友人関係を行為するための一つの要因となっている。以下、インタビューを分析しながら、ロングの遂行的アイデンティティ構築の原則を分析していきたい。

インタビュー断片 1

- 1 ロング 今はそんなにないですかね
- 2 IR そんなにってことはたまにはある感じですか
- 3 ロング たまには::, まあたまにはあるっていうか名前を言ったらほぼ聞かれるので、
ハーフですか::↑みたいな hh
- 4 IR あ::
- 5 ロング いや、一応アメリカ人ですって hh
- 6 IR なるほど h 一応 hh
- 7 ロング そう、でもずっと日本なんで英語できないんですけど、ってね hh
- 8 IR あ::もう言っちゃうんですね
- 9 ロング そうですね、だいたいじゃあ英語::できるんですね:とか、ん:, これ英語でな
んていうのみたいなことを言われるので、うん、事前にもう英語できないで
す、って言っちゃいますね
- 10 IR なるほど

① : 語られる世界におけるやりとり

この例は、インタビュアー(IR)の今日本で外国人、あるいはアメリカ人として扱われると感じることはあるか、という質問に対する答えから始まる。それに対してロングは「今はそんなにない」という返答をしており、さらに IR が「たまにはあるのか」と質問を行うと、「名前を言うと大体聞かれる」と返答し、その例を語りだす(L3, 5, 7)。まず L3 では「ハーフですか」という他の参加者からの質問を「みたいな」ということによって引用であることを示しながら提示し、さらに L5 においてそれに対する自身の返答を、「一応アメリカ人です」と語っている。さらに、「一応」という IR による繰り返しに促される形で、一応アメリカ人という意味を「ずっと日本なんで英語できない」と、ずっと日本に住んでいるため英語ができないが、国籍はアメリカ人であるということを語っている。さらに、L9 でそこまでの自身の語りをまとめて、「事前に英語ができない」と述べることを語っている。

ロングの語るこの例は、これまでの経験から語られている体験談であり、スモール・ストーリーの一つであると考えることができるだろう。ここでは、アメリカ系の苗字を持っているロングが、初対面の時には他の参加者から「ハーフですか」と言われて外国人性のある人物として考えられていることが語られている。そして、それに対してロングは、それを部分的に肯定しながらも、英語ができないことを述べており、このような初対面場面におけるロングの一般的な対応が語られていると考えることができるだろう。

② : インタビューにおけるやりとり

すでに述べたように、この例は、IR の今日本で外国人、あるいはアメリカ人として扱われると感じることはあるか、という質問に対する答えから始まる。これに対する「今はそんなにない」というロングの返答には二つの含意がある。それは、後述するように、昔は今とは異なっ

あるということである。事実、IR は L3 において「たまにはある感じですか」とそれを確認する質問を行っている。IR の確認に対してロングは、「たまにあるっていうか」と否定気味に返答を行って、レベル 1 で分析したような初対面場面の体験談を語っていつている。

この例でロングは、インタビューにおける IR からの質問に答えようとする一方で、自身の外国人性、あるいはアメリカ人性に関する質問に対しての返答に消極的であるように見える。それは例えば L1 「そんなにない」という弱める表現形式の使用や、L3 からの体験談が L2 における IR の確認に対する返答として語られる、あるいは L7 が L6 における繰り返しの促されているという部分に現れていると言えるだろう。一方でこれらの IR からの働きかけに対してロングは、この例だけでなくインタビューを通して、不適切な反応(例えば返答の拒否)をすることは見られなかった。すなわち、ロングは自身の外国人性、あるいはアメリカ人性に関する消極的であるものの、IR の質問に対しては適切に答えられるように返答をデザインしている、つまりインタビュアーの質問に適切に返答するインタビューーとして期待される行動から逸脱しないように行為していたと考えられる。

③ : ロングの遂行的アイデンティティ構築の原則

以上のようにレベル 1 においては、自身の体験談が語られており、初対面の時に「ハーフ」と質問されること、そしてそれに対して一応アメリカ人であるが英語はできないというロングの対応が語られていた事を分析した。レベル 2 においてはロングが自身の外国人性、あるいはアメリカ人性に関わる話題において消極的である一方で、IR の質問に対しては適切に返答していることが分析された。これらを踏まえてロングの遂行的アイデンティティ構築の原則を解釈したい。

まずインタビュアーとのやり取りからも分かるように、ロングは「外国人性」、あるいは「アメリカ人性」に関して語ることは消極的である。一方、この例で語られているロングのストーリー・ストーリーは、一応アメリカ人であるが英語ができないという自身のアメリカ人らしさを最小限にしようとするロングの対応が語られているものである。これはレベルで分析されたロングの消極的な姿勢からも分かるように、IR に対しても同様であった。すなわちこの例からは、ロングが以下の 2 点の遂行的アイデンティティ構築の原則を持っていることが分かる。

マキシム：外国人性、あるいはアメリカ人性を潜在化させる

ストラテジー：外国人性、あるいはアメリカ人性に関わる遂行的アイデンティティが構築された場面には、それを最小化する

ロングは第一に、自身がアメリカ人であることを積極的に言うことが無く、通常は潜在化させている。これは参加者や場面に関係なく広く様々な場面向けられるという意味で、マキシムのレベルに属すると思われる。一方で、自己紹介で名前を言うという、避けることのできない外国人性の提示が行われる際には、その外国人性を出来るだけ抑えるようにしているようである。これは参加者ではないが、遂行的アイデンティティが構築された場面と限定的であり、限定的な場面向けられている、ストラテジーとして理解することが出来るだろう。このようなロングの遂行的アイデンティティ構築の原則は、後述するように、ロングが経験してきた、

過去の様々な場面においても行われており、ロングの遂行的アイデンティティ構築の原則の中核をなしていると考えられる。次の断片も併せてみてみたい。

インタビュー断片 2

- 1 ロング 中学校の時は結構ありましたね
- 2 IR ん::
- 3 ロング 簡単な漢字を読んだだけで驚かれたり h
- 4 IR なるほど h
- 5 ロング っていうのは嫌でしたけどね
- 6 IR ん::
- 7 ロング あ:と、これは明確に覚えてるんですけど、最初の授業で教科書を読む
番がまわってきたんですよ、で、後ろの席に座ってたんですけど、教室
のみんなが急に振り向いて自分の事じっとみてきたのにびびって、可
能な限り下手な英語で読んだんですよ
- 8 IR は::

① : 語られる世界におけるやりとり

この例は、IR がロングに今までアメリカ人として扱われたと感じたことはあったかどうかを質問している過程で語られた。自身の中学時代の話をしていくなかでロングは、英語の授業での経験を語っている(L7)。ここでのロングの語りは、先ほどと同様、中学校時代の経験から語られている体験談であり、スモール・ストーリーの一つであると考えられるだろう。その中でロングは、「教室のみんなが自分の事」を見てきたことに驚き、「可能な限り下手な英語」で教科書を読んだ体験が話されている。中学校の最初の英語の授業であるとはいえ、ロングの名前が同じクラスの人に知れていたことは想像に難くない。すなわち、ロングが「アメリカ人」あるいは「外国人」、もしくは「ハーフ」だと判断され、そこから英語ができるという期待をされていたわけである。そのような期待を感じたロングは可能な限り下手な英語で教科書を読むという行動をとることによって、自身の「外国人性」、あるいは「アメリカ人性」を最小化しようとしていたわけである。

② : インタビューにおけるやりとり

この例は、L1 において中学時代はアメリカ人として扱われていたというロングの語りから始まっている。そして L3 ではその例として、「簡単な漢字を読んだだけで驚かれた」という経験が語られている。続けて、L5 ではそれが「嫌だった」ということが語られ、さらに L7 での体験談へとつながっていく。すなわち、L7 における語りは、中学時代にアメリカ人として扱われていたことが「嫌だった」というロングの語り全体の一部として表れているわけである。一方で、先ほどの例とは異なり、IR は L2, 6 における「ん::」や L4 における「なるほど」など、あいづち的な発話をするのみで、相手の発話を引き出すような質問などはしていない。すなわち、先ほどの例とは異なり、アメリカ人として扱われることが嫌だったという事実は、ロングにと

っては消極的になるべきことではないむしろ積極的に共有したい事柄であった。それは、L7の冒頭で「これは明確に覚えている」と述べているように、ロングにとっては非常に衝撃的な出来事であったことを強調する語りにも表れていると考えられる。

③ : ロングの遂行的アイデンティティ構築の原則

先ほどの例1で分析された、「外国人性」、あるいは「アメリカ人性」に関わる遂行的アイデンティティが構築されたときにはそれを最小化する、というロングの遂行的アイデンティティ構築の原則はこの例2のレベル1で分析されたものと矛盾しない。すなわち、ロングが中学に在学していたころから保持していた原則であるということが出来るだろう。しかし、レベル2で分析されたように、例2では「嫌だった」という語りを、アメリカ人性に関わる話であるにも関わらず、むしろ積極的に語るという、例1とはある種矛盾するような結果となった。しかし、ロングのこのスモール・ストーリーは、断片1で語られていた英語が出来ないという事実を、実際の場面で行っている実践について語っており、それはIRに向けられているとも考えることが出来るだろう。すなわち、IRはすでに、ロングがアメリカ人であることを知っている存在であるために、IRから自身に向けられるアメリカ人としての期待を弱めるための、ロングのストラテジーが現れているわけである。このような、アメリカ人性を最小化させるというロングのストラテジーは、アメリカ人性を潜在化させるというマキシムと明らかに相互依存関係にあるだろう。

一方でこの語りがIRに向けられているということは、別の可能性も示唆している。すなわち、ロングがIRを同じアイデンティティを持つ者として位置づけて語りを行っている、ということである。次の断片では、ロングがIRを同じアイデンティティを持つ者として、アドバイスを送るという行為が見られる。

インタビュー断片3

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | IR | いつ頃から変わった、ってのはあるんですか |
| 2 | ロング | ん:::(1.5)まあこう、ドラマチックな、出来事があったわけではなくて、小さな出来事の積み重ねって感じなんですよ |
| 3 | IR | あ::, 例えば, どんな |
| 4 | ロング | そうですね, よく覚えてるのは, 結婚するとき, あの婚姻届を出すときに, あの::出生証明, みたいなものがあって, それが必要だったんですよ |
| 5 | IR | はいはい |
| 6 | ロング | それで, それは日本じゃ手に入らなくて, 取り寄せなきゃいけなかったんですよ |
| 7 | IR | あ::そうなんですか |
| 8 | ロング | そう, それでそれを知ったのが結構, その出しに行くこの3日前とかでhh, やばいやばいみたいな感じになったのは覚えてますね, すごい, 怒られそうになって, もうすごい, 焦りましたね:hh |
| 9 | IR | hhh |

- 10 ロング まあ結局、何とか送ってもらえて、間に合ったんですけど
 11 IR お::それはよかったですね hh
 12 ロング 良かった hh, もうほんとに、あの::, 気をつけたほうがいいですよ h
 13 IR hそうですね::, いや, それはでも知らなかったです

この断片は、IR がロングのアメリカ人という意識の変化について質問している過程で語られたものである。ロングは自身の意識が劇的に変化したわけではなく、小さな出来事の積み重ねによって変わっていたことを語っている(L2)。そしてその例として、自身が婚姻届を提出する際のトラブルの例を挙げ、その具体例を提示していく。日本では、外国人が婚姻届を提出する際には出生証明のようなものを同時に提出する必要があることが語られ(L4)、その事実を知ったのが婚姻届を提出する直前であったために、非常に焦りを感じたというロングの経験が語られている(L8)。最終的にはなんとか書類を手に入れることが出来たが、注目したいのは、一連の経験を語り終えた後に IR に対して「気をつけた方がいい」とアドバイスを送っている点である。

ロングが自身の経験を語り、日本では出生証明を手に入れることが出来ないことが語られると、IR はそれに対して「そうなんですか」と意外性を表明し、確認を求めている。すでに知られている情報や予想通りの情報に意外性はないとすれば(加藤 2005)、逆説的に、IR はこの情報について知らなかった、予想していなかったことが表明されている。ロングはこの表明を受けて、自身が「すごい焦った」というトラブルを IR が繰り返さないように助言を送っているわけである。これはすなわち、将来的に婚姻届を提出する際には IR も出生証明などを海外から取り寄せる必要がある人物であることをロングが知っており、自分と同じ日本に居住する外国人として位置づけている、ということである。

もちろんここでの位置づけをそのままインタビュー全体に適用することは出来ないが、少なくともロングが IR を自身と同じカテゴリーに属する人物として見なす可能性がある、ということは出来るだろう。ロングが先の例において積極的に自身の外国人性に関わる話を行ったという事実は、IR を同じアイデンティティを持つものとして位置づけていたため、ともいうことができるかもしれない。他方、ロングはインタビューにおいて、断片 1 で分析されたようなストラテジーが適用されない場面についても言及している。次の例を見てみたい。

インタビュー断片 4

- 1 ロング いや::, やっぱほとんど無いですね, まあ, 友達とネタ的にはありますけど hh
 2 IR ネタですか h
 3 ロング 例えば, あの::友達とかと飲んで, 最後にラーメン食べに行くかみたいな, よくあるじゃないですか
 4 IR そうですね h
 5 ロング そういう時とかに, こう箸を渡してくれたりするんですけど, ロング, 大丈夫か, スプーンとフォークもらおうかっていう感じで hhh
 6 IR hhh

- 7 ロング それでまわりもそれにのってきたり，ごめんやっぱステーキの方が良かったねみたいな，いや::大丈夫です hh，みたいな感じ::，でいじられることは，結構ありますね hh
- 8 IR hhh そうなんですね h

① : 語られる世界におけるやりとり

この断片は，先の例と同様，現在アメリカ人や外国人として扱われることはあるか，という質問に対する答えを産出していく流れの中で語られたものである．この断片で，話されているスモール・ストーリーは，ロング自身の体験談であるが，L1 でロングが述べる「ネタ」の例が話されている．ストーリーにはロングとロングの友人らが登場しており(L3)，彼らがお酒を飲んだ後にラーメン屋に入ったとき的一幕が語られている．そこでは，ロングの友人が箸を渡す際に，ロングを箸の使えない者として位置づけて，フォークやスプーンをもらおうか，という提案がなされている(L5)．さらに，他の友人もそれに追従するように，ロングにとっては飲み会の後に食べるものとしては，ラーメンよりもステーキの方が好ましいことが述べられ，友人が謝罪している様子が語られている．ここでロングは，日本では一般的な食器である箸が使えないという点や，飲み会のあとにいわゆる「シメ」としてラーメンを食べるよりも，ステーキを好む者として位置づけられており，日本人とは異なる文化を持つもの，いわば外国人として扱われていることが分かるだろう．さらにいえば，ラーメンの代わりにステーキを提示していることから，単に外国人と位置づけるよりも，アメリカ人として位置づけていると考える方が妥当であるように思われる．いずれにせよ，そのような位置づけに対してロングは「いや，大丈夫です」と述べることによって，そのような「アメリカ人」としての遂行的アイデンティティを受け入れて発話していることが分かる．すなわち，箸が使えることやラーメンを食べることが当然，あるいはそれらを好んでいることを表明するなどして前提となる遂行的アイデンティティを否定するのではなく，あくまでもその遂行的アイデンティティに従いながら返答しているのである．

② : インタビューにおけるやりとり

一方で，ロング自身が述べるように，これらの語りはすべて「ネタ」の例え話として語られている(L3)．「ネタ」という言葉はやや曖昧で内容が示されていないため，IR はその内容の確認を求めており(L2)，説明が開始されている．ロングはその「ネタ」の内実を，スモール・ストーリーを語ることによって説明しているが，頻繁に笑いを交えながら語りを進めている(L5, 7)．すなわち，ストーリーの登場人物たちが行っている行為，すなわちロングをアメリカ人として位置づけて行われたやりとりはあくまでもロングに対する「いじり」であって，冗談としてのやりとりであることを IR に対して示していると考えることが出来るだろう．IR もそれに対して同調するように笑っており(L6, 8)，それが「ネタ」であり，冗談としてのやりとりであることに理解を示していると言えよう．

③ : ロングの遂行的アイデンティティ構築の原則

遊戯性のある「からかい」や「いじり」という行為は，攻撃的な内容であっても受け手に心

地よさを感じさせる要素があることが指摘されているが(葉山・櫻井 2008; 望月他 2017), これは、ここで語られているロングと友人たちのやりとりにおいても同様であるように思われる。すなわち、彼らの間においてはロングのアメリカ人という属性は「いじりの対象となっており、友人関係を行為し、確認し合うためのリソースの一つとなっていると考えられる。ここで語られる一連のやりとりは、断片 1 で示した「外国人性, 外国人性, あるいはアメリカ人性に関わる遂行的アイデンティティが構築された場面ではそれを最小化する」というストラテジーとは明らかに矛盾している。しかし、ここにはインタビューでは顕在化しなかった、異なるマキシムと相互関係にあるストラテジーが適用されているための結果であるだろう。

7. まとめと今後の課題

本節において分析されたロングの遂行的アイデンティティ構築の原則は以下のようなになるだろう。ロングは、「一応」としながらも自らのことをアメリカ人だと考えているようである(決定要因)。一方でロングは、アメリカ人に期待されるような英語能力を持っていないと感じており、自身がアメリカ人であることは周囲には言わず、基本的に潜在化しようとしている(マキシム)。しかし、初対面場面で名前を言う場面など、顕在化してしまった際にはそのアメリカ人性や外国人性を最小化するように努めている(ストラテジー)。この最小化は「アメリカ人」あるいは「外国人」にかかる期待を否定すること、すなわち英語ができないと述べることによってなされている(普通規則)。

一方で、IR とは自身と同じアイデンティティを持つものとして位置づけることが見られた点や、友人との相互行為においてはこのような最小化は見られず、別のストラテジーが働いている可能性があることも指摘した。ここでどのようなストラテジーが働いていてそれがどのようなマキシムや決定要因にもとづいているか、またそれがどのような場面でそれが優先されるのかについては、別稿での検討が必要であろう。

これらが、本当に習慣的に行われてるとすれば、それはロング自身が経験してきた様々な場面での相互行為を通して構築されてきた遂行的なアイデンティティを蓄積させ、それに対処するためのストラテジーが形成されたということは疑いようがないだろう。本稿は、これを明らかにするための、限られたデータを用いた、最初の試みにすぎない。今後データを増やして、各レベルの基準や複数の原理の関係性などをより深く検討していく必要があるだろう。

ⁱ 対自的なアイデンティティと対他的なアイデンティティ、すなわち自我アイデンティティと自己アイデンティティについては河井(2011, 2013)での議論を参照されたい。

参考文献

- 浅井亜紀子 (2006). 異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ ミネルヴァ書房
- Banberg, M. (1997). Positioning between structures and performance. In M. Bamberg (ed.), *Special Issues Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis, Journal of Narrative and Life History*(7). pp.335-342.

- (2004). Talk, small stories, and adolescent identities, *Human Development*(47). pp.331-353.
- Baynham, M. (2015). Identity: Brought about or brought along? Narrative as a privileged site for researching intercultural identities. In F. Dervin & K. Risager (eds.), *Researching identity and interculturality*. pp.67-85. London: Routledge.
- Bourdieu, P. (1980). *Le sens pratique*, Editions de Minuit. (今村仁司・港道隆訳(1988). 実践感覚 みすず書房)
- Butler, J. (1990). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. New York: Routledge.(竹村和子訳(1999). ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱 青土社)
- Erikson, E.H. (1959). *Psychological Issues : Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (小此木啓吾訳編(1973). 自我同一性 誠信書房)
- (1963). *Childhood and Society*, New York: W.W. Norton & Company. (=1977/1980, 仁科弥生訳 幼児期と社会(1・2) みすず書房)
- (1968). *Identity: Youth and Crisis*. (岩瀬庸理訳 (1973). アイデンティティ—青年と危機 金沢文庫)
- Fishman, J. (1972). *The sociology of language; an interdisciplinary social science approach to language in society*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Gergen, K. J. (1999). *An Invitation to Social Construction*. Sage. (東村知子訳 (2004). あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版.)
- Goffman, E. (1959). *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company, Inc. (石黒毅訳 (1974). 行為と演技—日常生活における自己呈示 誠信書房.)
- Goffman, E. (1963). *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (石黒毅訳(2001). スティグマの社会学: 烙印を押されたアイデンティティ せりか書房.)
- Hall, S. (1990). Cultural Identity and Diaspora in *Identity, Community, Culture Difference*, pp. 222-237. (小笠原博毅訳 (2014). 文化的アイデンティティとディアスポラ 現代思想 42(5) pp.90-103 青土社)
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究 (79) pp.18-26
- 石川准 (1992). アイデンティティ・ゲーム-存在証明の社会学 新評論
- Georgakopoulou, A. (2007). *Small stories, interaction and identities*. Amsterdam: John Benjamins.
- イェルガコポロ, アレクサンドラ(2013). ナラティブ分析 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線: 人は語ることで何をなすのか pp.1-42 ひつじ書房
- 加藤雅人 (2005). 意味論的情報の可能性と限界 関西大学総合情報学部紀要(23) pp.37-50
- 河井亨 (2011). アイデンティティ形成についての社会学的考察—Erikson のアイデンティティ理論とそれ以降のアイデンティティ研究の検討 現代社会学理論研究(5) pp.146-158
- (2013). E.H.Erikson のアイデンティティ理論と社会理論についての考察 京都大学大学院教育学研究科紀要(59) pp.639-651

- 岸政彦 (2009). ハビトゥスとアイデンティティ：非対称性の理論への試み 龍谷大学社会学部
紀要(34) pp.42-54
- 今千春 (2012). 韓国人居住者の接触場面に向かう言語管理：言語バイオグラフィー からの記述
の試み 村岡英裕[編]外来性に関わる通時性と共時性：接触場面の言語管理研究 vol.
10 千葉大学大学院人文社会科学科学研究科研究プロジェクト報告書(292) pp. 49-67
- 望月正哉・澤海崇文・瀧澤純・吉澤英里 (2017). 「からかい」や「いじめ」と比較した「いじ
り」の特徴 対人社会心理学研究(17) pp.7-13 大阪大学大学院人間科学研究科 対人
社会心理学的研究室
- 窪田光男 (2005). 第二言語習得とアイデンティティ—社会言語学的適切性習得のエスノグラフ
ィー ひつじ書房
- 村岡英裕 (2010). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか：類
型論的アプローチについて 村岡英裕[編]接触場面の変容と言語管理—接触場面の
言語管理研 vol.8 千葉大学大学院人文社会科学科学研究科研究プロジェクト報告書(228)
pp.47-59 千葉大学人文社会科学科学研究科
- 中河伸俊 (2010). 「自己」への相互行為論アプローチ：経験的探究に有効な再定式化のために
人文学論集(28) pp.45-71 大阪府立大学
- ネウストプニー, J. V. (1989). 日本研究のパラダイム：その多様性を理解するために 世界の中
の日本 vol.1 pp.79-96 国際日本文化研究センター
- Neustupný, J.V. (1978). *Post-Structural Approaches to Languages: Language Theory in a Japanese
Context*. Tokyo: University of Tokyo Press
- (1985). Problems in Australian- Japanese contact situations. In Pride. J. B. (Ed.), *Cross- cultural
encounters: communication and miscommunication*. pp.44-84. Melbourne: River Seine.
- (1994). Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan- Terry.
J. (Eds.), *English and language panning: A Southeast Asian contribution*. pp.50-69.
Singapore: Academic Press.
- Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. Essex,
UK: Pearson Education Limited.
- Norton, B., & McKinney, C. (2011). An identity approach to second language acquisition. In D. Atkinson
(Ed.), *Alternative approaches to second language acquisition*. New York: Routledge. pp.73-
94.
- 野崎京子 (2007). 強制収容とアイデンティティ・シフト：日経二世・三世の「日本」と「アメ
リカ」 世界思想社
- Pavlenko, A., Blackledge, A., Piller, I., & Teutsch-Dwyer (2001). *Multilingualism, second language
learning, and gender*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 桜井厚 (2002). インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方— せりか書房
- 関口知子 (2001). 在日日系ブラジル人生徒のアイデンティティの全体像 異文化間教育(15)
pp.162-187 異文化間教育学会
- 椎野信雄 (1980). 社会的世界とアイデンティティ ソシオロギス(4) pp.66-78
- 末田清子(2012). 多面的アイデンティティの調整と面子(フェイス) ナカニシヤ出版

鈴木一代 (2008). 海外フィールドワークによる日本系国際児の文化的アイデンティティ形成
ブレーン出版

塘利枝子 (2010). 生涯発達における文化間移動-青年期までのアイデンティティ形成を中心に
して- 異文化間教育(31) pp.19-32